



## 学園歌の沿革と現状をみる : その正しい継承と高揚を願って

著者	石田 健一
雑誌名	関西大学年史紀要
巻	18
ページ	35-56
発行年	2009-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/8801">http://hdl.handle.net/10112/8801</a>

# 学園歌の沿革と現状をみる

—その正しい継承と高揚を願って—

石田健一

## はじめに

現在、関西大学をはじめ、学校法人関西大学が設置するそれぞれの学校・園には、学歌、校歌、学生歌、逍遙歌、そして応援歌等、多くの学園歌がある。今回はその中から、学歌と学生歌をとりあげて、沿革やエピソード、そして現状を記して、種々の問題を改める方向について述べてみたい。

沿革を求めようとした動機がいくつかあった。その一つは、学園歌を歌う機会が増える大学創立一二〇周年の佳節を目前にした時期に、歌詞やテンポのばらつきを解消しておく必要があると考えたことである。

折しも、平成二二(二〇〇〇)年七月一九日に開催の年史編纂委員会の席上、神堀忍委員から現行学歌の歌詞の誤謬が指摘された。そこで、年史編纂委員会では、その確定版を作成するため、事務レベルで作業チームを設けて着手し、歌唱の際や多様な印刷物を想定し、完成原稿(版下)として使用可能なシート様式の「大学歌集ファイル」を作成した。これにより再生産物の統一を図れば、校正段階も省力化できることから一石二鳥のメディアを提供したのであった。このことは「関西大学通信」(第三〇八号)にも掲載して広く関係者に利用を推奨したのであった。

こうして、少しは効果がみられたが、その後、歌われ

ている学歌のテンポが指定よりもいたずらに遅い風潮が指摘されるようになった。例えば学歌は作曲者が「♪|| 一一二」と指定しているが、実際、巷間でア・カペラで歌われる学歌は概してテンポが遅く、「♪|| 九六」程度に落ちたケースに出会うことが多い。これでは、原譜に指定の「力強く明瞭に、マーチのテンポで」の雰囲気には欠ける。

また、学園歌のうち、とくに印刷物にみられる学生歌の歌詞には誤字が多い問題点がある。歌詞の中には、現在、日常語にほど遠い用語を、一方的に解釈して適当に置き替えている例が目立つのである。

そこで、これらの学園歌の現状を示し、原点を求めて沿革をたどり、関西大学関係者のアイデンティティの象徴である学園歌の正統を確認し、継承していくのに役立つたいと考えたのが、そもその動機である。

音の保存と再生は、トーマス・A・エディソン（一八四七—一九三二）の蓄音機の発明（一八八七）により可能となった。学歌の成立は蓄音機以後ではあるが、保存されている音源史料は乏しい。正しい学園歌の普及を願

って、量産して配布されたのは、教育後援会が昭和四四（一九六九）年に企画・制作したソノシート「われら関大生」を嚆矢とし、今日の「われら関大生」（CDエキストラ版）まで続けられている。

本稿では、私の見聞によるところも多少はあるが、主として関西大学の貴重な年史資料から引用して組み立てた。引用、参照した資料は、作詞者、作曲者の原史料のほかに、①『關西大學創立五十年史』（昭和十一年五月一日発行）②『關西大學七十年史』（昭和三十一年三月三十一日発行）③『關西大學百年史』「通史編 上」（昭和六一年一月四日発行）『同』「通史編 下」（平成四年三月三十一日発行）ほか、『同』「人物編」「資料編」「年表・索引編」④『關西大學百二十年史』⑤『關西大學百年のあゆみ』（以下『あゆみ』は一十五年・二〇年にも）等、いずれも略記して出典を示した。また『千里山學報』は昭和四（一九二九）年に『關西大學學報』と改題され、両題名の学報が重複した期間がないため、単に『学報』として通刊番号を併記した。さらに、取り上げた現行の学歌の歌詞については他の印刷物等で周知のこととして

割愛した。

## 一 関西大学学歌について

### 1 初めに「校歌」ありき

明治一九（一八八六）年に、西日本で初めて創設された法律の専門学校としての関西法律学校を源流にもつ関西大学には、現行の「自然の秀麗 人の親和」ではじまる「学歌」が生まれるはるか三〇年前から「校歌」が存在した。この、「校歌」は、池邊義象（一八六四～一九二三）作詞、弘田竜太郎（一八九二～一九五二）作曲によるものであった。「遙に高き生駒山 溶々尺きぬ淀の水」と続くものであったが、今では譜面の全容まで知る術もない。池邊は藤園の号をもつ高名な国文学者で、古代法制にも精通し、一高教授、御歌所寄人を務めた人物。また弘田は東京音楽学校卒・同校教授、「叱られて」「雀の学校」などの童謡や歌曲に作品が多い。しかし、大正期後半にいたり、大学令による大学への昇格を目指す趨勢にあつて、この「校歌」の歌詞には感覺的にも一步のずれが感じられ、昇格の熱い潮には乗れない隔靴搔痒の感

が生じつつあつたものと推察される。とくに大学令による大学への昇格をめざすなか、請われて総理事に就任した関西財界の巨頭・山岡順太郎（一八六六～一九二八）の胸にその思いが強かつたことは、山岡が『学報』をはじめとする当時の学内メディアに残している数かずの文章から容易に理解することができる。

こうして、大正一〇（一九二一）年二月五日、文部大臣に大学昇格認可申請書を提出してから、実に一年四か月を経た大正十一年六月五日、ようやく、その認可を得たのであるが、認可申請と平行して「日進月歩の時勢と校運にふさわしい新たな学歌」（『学報』第二号Ⅱ要約）を求める機運が高まつていったものである。

### 2 新学歌制定の機運

現在歌われている「自然の秀麗 人の親和」で始まる三節からなる学歌は、こうした状況を背景として大正一一（一九二二）年九月一日の理事会で決議して制定された（制定に関する諸記録の中には、九月一五日付とした記録もある）もので、曲は二九小節、したがって演奏

時間は六二・五秒の曲である。

関西大学では、この年の六月五日、念願の大学令による大学への昇格が認められたのを機に、山岡は、従来の校歌（国文学者・池邊義象作詞、弘田竜太郎作曲）を廃して、新時代にふさわしい新しい学歌を求めた。文部大臣に大学昇格認可申請書を提出したあと、教授・服部嘉香（一八八六―一九七五）に作詞を依頼していたものが、服部は歌詞の創作過程で、山岡順太郎からいくつかの注文をもらっていた。その意も体しつつ服部が完成させた歌詞が『学報』（第二号）に紹介されている。そこには、服部に依頼し、完成した歌詞を「この歌詞を案として紹介し、大方の批判を俟つ」と結んでいる。広く学

生、教職員、校友に意見を求めているあたり、なかなか進取的で太っ腹である。

服部の原作は一節七聯、三節からなるが、原作であるため、ここに取り上げておきたい（スペース制約上、ここでは二句一聯ごとの改行は、スラッシュで区切った）。

（一）自然の秀麗 人の親和／たぐひなき この學園。／われら立つ 人生の曙に／遠き理想を 仰ぎつ、／学ぶは一途 純正の／若き心に 讚へん／關西大學 長き歴史。

（二）自學の修練 自治の發揮／たぐひなき この學園。／われら持つ 博大の精神に／正義の奉仕 世に為すと／期するは一途 研學の／日目を樂し



山岡順太郎



宮島 綱男



服部 嘉香

み 忘れまじ／關西大學 重き使命。

(三) 眞理の熱愛 學の權威／たぐひなき この學園。／われら爲す 潑刺の躍進に／高き文化を創らんと／勵むは一途 洋洋の／榮えの時代に

先駆くる／關西大學 高き譽

この原作に大方の批判を俟ったわけであるが、果たしどれだけの意見があったのかは分からない。この歌詞に対して、山岡と専務理事・宮島綱男（一八八四―一九六五・のち理事長）の二人が加わって、前後三回にわたり山岡邸で推敲を重ねたことが記録に残っている。

服部は大正一二年に『学報』（第六号）に「本學學歌に就て」の一文を寄せているが、その中で「學歌の歌詞に付ては、山岡總理事邸で前後三回宮島専務理事と共に三名協議をいたしました。總理事の懇切な御注意により訂正した部分も少なくありませんので、本来は總理事と私との合作ともいふべく、一層合理的に言へば、總理事、専務理事、私三人の合作であります。茲に私の良心の命ずる所により一言加へておきます。」とあり、三人で推敲してやっと完成させた様子が窺えるのである。鳩首協

議では相当に活発な議論のすえ、字句が修正されたことが現行の歌詞との対比で明らかである。

しかし、新しい学歌の制定を決議した九月一日の理事会の議事録には不可解な点が残る。議事録には、

#### 一、學歌選定ニ関スル件

従来ノ校歌ヲ廢シ左記ヲ本學學歌トシテ新定ス  
服部嘉香氏 作

藤井清水氏 曲

但作曲ハ更ニ之ヲ山田耕<sup>つとむ</sup>作氏ニ依頼ス

とある。この議事録からは、学歌には藤井清水の作曲を充てて「新定」したものの、納得がいかず、あらためて山田耕作に作曲を依頼したとしか理解できない。そして、学歌として制定され定着したのは山田耕作・作曲の現行の学歌である。藤井の曲は、この筋書きでは日の目をみなかったことになる。今ではその断片すら見いだすことはできない。ただし、服部が先の『学報』（第六号）に書いているところによると、藤井清水には、「いずれ学歌の作曲を依頼する」といったくたくりを読み取ることができる。それも、「御空に輝く撩爛の」と歌う現行の

学生歌ではないはずで、この頃の実事経過を追うことはかなり難しい。

### 3 「学の実化」は教育理念

「学の実化」は大学の教育理念であり学風でもある。

これは、学歌第二節第一聯にも「真理の討究 学の実化」と歌いこまれている。

学歌では、歌唱上の理由で「じつげ」と歌う。これは作曲家・山田耕筰の意向によるが、拗音や長音の不明瞭な発声を避けるためである。普通名詞では「じっか」であり、山岡の女婿にあたる岸田幸雄氏（のち兵庫県知事）から「義父はいつも学のジッカ、ジッカと言っていました」という聞き書きを学術情報事務局・熊博毅次長が残している。これは一部で「じつけ」とも発音されていたが、こう発音すると仏教用語の「権化（ごんげ）」の対義概念を指す。関西大学では、この「学の実化」は日常的には「じっか」と発音しつつも、学歌では「じつけ」と歌ってきたものと推測される。

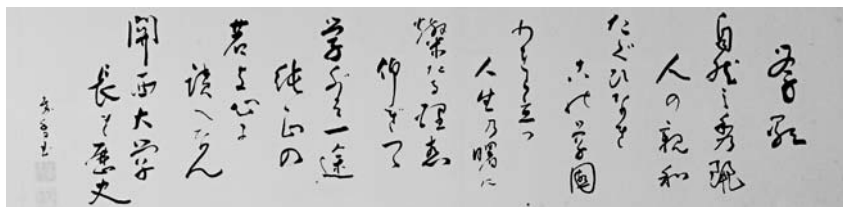
総理事・山岡は、大学令による大学への昇格を果たし

たことをうけて、『学報』（第二号）に「学理と実際との調和」と題する記事を掲載して、新大学のあるべき方向を示している。「学の実化」を具現化するために「学理と実際との調和」「国際的精神の涵養」「外国語学習の必要」「体育の奨励」を力強く提唱して邁進したことがよく分かる。今日、この大学の理念は多次元にわたる発展をみせて教学方針の根幹として脈打っている。次つぎと内外の有名人を招いて「学の実化講座」を開講したのも、この四本柱の成就を期す山岡の熱い願いによるものであった。

「真理の討究」と「人格の陶冶」を二本立てとし、「学問の実際化」「自由の訓練」「自治の發揮」も織り込みたいたというのが、作詞にあたっての大学首脳陣の注文であったという作詞者の述懐が『百年史』（上四二七ページ）に記されている。

### 4 学歌の成立と歌詞

現行の学歌は、今述べた張り詰めた雰囲気の中で修正されてようやく完成をみたものである。三節にわたり、



歌学揮毫香嘉部服

歌詞はみごとに推敲されている。

各節七聯、各聯は上句・下句で構成されているが、各節ともに各聯の上句・下句、いずれも音節数、品詞、構成等がよく推敲され、統一が図られていて立派である(ただし、各節の対応語句のアクセントまでは整備されていない)。しかし、現在の歌詞は作曲家の意向による修正の結果である。山田耕筈は、歌詞原作の第三節第一聯が「自學の修練 自治の發揮」であったのを、「自由の尊重 自治の訓練」と読み替えるように、また、同時に「学の実化」を「学のじつげ」と歌うように求めていたのである。歌詞はこのように修正されて、現在に至っているのであって、この時をもって学歌では「学の実化」は「がくのじつげ」となったのである。

ただ、昭和一一年五月一日に発行された『五十年史』をはじめ、『七十年史』『百年史』は、いずれも服部嘉香のオリジナル「自學の修練 自治の發揮」(第三節第一聯)として記載し、現行との違いを注釈で説明する手法をとっている。

また、各節の最終行は「関西大学 長き歴史」のよう



に「関西大学」は一度出てくるだけで、これが歌詞としては正しい。歌唱時に「関西大学 関西大学／関西大学 長き歴史」と歌うのは作曲上のテクニクによるリフレインである。

ちなみに昭和三〇年、母校が創立七〇周年を迎えた後、服部嘉香は歌詞の扁額を三幅揮毫し、老成したみごとな墨跡を残している。当時、校友会にあつて機関紙「関大」の発行に携わっていた神屋敷民蔵（昭四専国、評議員、のち校友会事務局長）は、作詞者・服部の言葉を受けて、「歌詞としては（関西大学 長き歴史）で、「関西大学」は一回です」と、きつとした口調で話していたことを思い出す。ただし、服部は歌唱にも配慮してか、節の終りに小書した「関西大学 関西大学」を挿入してから「関西大学 長き歴史」と結んでいる一幅と、「関西大学 長き歴史」とだけ認めた紙幅との二種の扁額を残している。

また、同じ創立七〇周年の際に、服部から、年月を経ているため、歌詞の一部を改訂したいという申し出があったことが記録に残っている。

この要望を受けて昭和三〇年九月八日に開かれた理事会は、

「学歌作詞者服部嘉香氏ヨリ希望アリタル関西大学学歌歌詞ハ改訂セズ新タニ作詞スルコトニ関シテ研究スルコト」

と議事録を残している。今日的にみても改訂の必要はないという考えであつたようである。なぜならば、「新たに作詞することに関して研究」を始めた形跡は、今のところ発見されていないからである。服部には、作詞当時の三人の鳩首協議の末の妥協の思い出から、佳節を契機として、あるいは納得のゆく修正をしたいという心残りがあつたのかもしれない。

学歌の歌詞に関しては、さらにもう一つ、あまり知られていないことがある。

昭和三〇（一九五五）年三月一〇日に開催された理事会の席上、「関西大学学歌をエスペラント語に翻訳すること。但しその版權は関西大学が所有すること」を決議した事実が残っている。ザメンホフの提唱した国際補助語としてのエスペラントが普及の波に乗っていた頃のこ



歌唱指導で来学した山田耕筈

とであるが、歌うことが目的ではなかった節がある。シンボルとしての学歌の歌詞をエスペラントでも残してきたかったということであろうか。

## 5 作曲家による歌唱指導

ところで、学歌の制定をめぐって作曲家の山田耕筈との接点は何度もあったことを記録から辿ることができる。服部と山田が旧知の間柄だということもあるが、まず、

作曲を依頼した時、ついで学歌の歌唱指導に来学した大正一二年二月二日。さらに同年一月五日、この日は山岡が提唱して始めた内外著名人による「学の実化講座」講師として「音楽について」をテーマに講演した時、そして大正一三年、大学の求めに応じて山田耕筈の歌う学歌のレコードを制作した際、となる。さらに、もう一度は、関西大学第一高等学校・第一中学校校歌（作詞・服部嘉香）の作曲を依頼したときである。

また、珍しいケースだと思えるのが、先の、山田から歌詞の修正が持ち出されたことである。通例は、作詞者から歌詞を受けた作曲家は作曲の過程で歌詞との不整合があると、妥協するか、事前に作詞者と調整して歌詞を修正するかの方法をとり、スタジオの中で完結させてしまうのが通常ではないか。完成後、作詞者、作曲者のいずれかから（または双方から）公然と修正を求めるということは、まずないはずで、いわばレア・ケースであろう。

この作曲者による歌唱指導で、山田耕筈は多くの貴重な教えを残した。それらは、細かく『学報』（第八号）

に記載されているので、その要点をまとめておきたい。

いる。

① 学歌を歌う場面は二つある。一つは式典、他の

一つは学生生活の各場面である。いずれの場合も、

厳粛・壮大・雅麗の曲調を保有しなくてはならず、

その点に作曲上苦心したことをよく理解されたい。

② 式場では厳粛に、スポーツでは軽快に、調子を

速めてマーチソングとして歌われたい。

③ 原歌詞の音節は整っているが、各節に対応する

各語のアクセントが異なるので、作曲で補正した

が限界がある。したがって、発想、発音、音程を

忠実に守り、表現力に欠けることのないように注

意されたい。

④ 和声は芸術として必要である。したがって伴奏

は重要である。しかし、訓練の足りない多人数の

合唱では伴奏でリードしなくてはならない羽目に

陥る。これを救済するためにはピッコロでメロデ

ィを主導する方法がある。

と述べているが、いずれも今日に通じる教えである。

さらに、歌う心得として次のとおりレッスンを残して

① シンコペーション（切分音）は明瞭に、だれ

てはいけない。妙味を發揮せよ。

例「一途」「純正のー（オー）」

② 「自然のー」以下は平気でやや早く／「此の学

園ー」はやや緩やかに／「我等立つー」以下は

元氣よく快活に／「燦たるー」は特に強く／「理

想をー」以下はやや円滑雅麗に／「関西大学ー」

第一、第二、第三と追進的に強く。特に三度目の

「かん」に注意せよ／「長き歴史ー」逐語的に

強く区切る。

（注・歌唱指導でも「理想をー」とあるため、

余計に「を」が必要と誤解させたことも考えら

れる。）

と結んだうえで、スポーツ応援の時は、「関西大学」が

三度続くそれぞれの間に「フレー フレー」や「歓声」

を挿入できるとしている。この芸の細かい教えは、いず

れも今に通じる貴重なもので、注意と関心を寄せてほし

い。この間の事情は『百年史』（上四二八ページ）にも

触れられている。

この歌う上での注意事項は、作詞者の服部も『学報』（第八号）に残している。要約は次のとおり。

欧米の大学ではあらゆる機会に学歌を歌う。当局者・教授団・学生団・校友団いずれも一斉に脱帽起立して厳肅、敬虔の態度を示す。学歌を歌う瞬間は大学精神そのものの中に全員が融合する瞬間である。老年校友も、その際は青春時代の心持に返って、感激に燃えた面持をもって歌うという美しい光景を本学においても見たいと思う。「永遠の相」を持つ学歌は未長く、若々しく至純な心持をもってとり扱ってほしい。学歌は学外でも遠慮なく歌いたい。直接の縁のない各方面の人々に対するユニバーシティ・エキステンションの一手段であります。

と、期待を寄せているが、この作詞、作曲を担った二人の教訓を蘇らせることも大切であろう。

また、大正一三年には大学の要請により山田耕筈自身が歌った関西大学学歌がレコードとなっていることが記録に残る。これも、山田が声楽家を紹介する方法もあつ

たであろう。ただし、山田耕筈の録音は『学報』（第八号）では「写声」という言葉を使っているが、山田が吹き込んだ音源（レコード盤ほか）は見当たらない。存在すれば、まさに「お宝発見」の話題性は間違いなく、今では「まぼろしの声」というほかはない。津田梅子による肉声の英語スピーチの音源を津田英学塾時代から大切に保存してきた津田塾大学を思うと残念である。

## 6 歌詞の誤謬

ここで、まえがきにもふれた学歌の歌詞の誤りについてふれておきたい。

学歌の歌詞は音節、構成等、みごとに推敲が行き届いているということを書いた。一時代、学歌の三大名曲として早稲田大学、明治大学の学歌と並び賞された時期があつたというが、メロディとともに、この歌詞の持つ端正さも、併せて称賛されたものであろう。われわれ後進が誇るべき遺産として、大切に受け継ぐべきである。

ところが、初めに書いたように「燦たる理想 仰ぎつ

つ」(第一節第四聯目)が「燦たる理想を 仰ぎつつ」と化けた遠因が意外なところにあつた。

年史資料として保管されている山田耕筰の作曲原譜を調べると、音符の下に歌唱用の歌詞が音節で振られているが、「さんたーる りさうを」と「:りさふを」があり、長音ではなく、助詞の「を」と勘違いしかねない文字が書かれているところがあるのである。音符の下に振り付ける長音のところへ何げなく「を」を挿入したが、それもその遠因であろう。幸いに、原譜では第一節だけしか譜面に振り付けられていなかったため、これが幸いとなつた。第二、三節も、いつかの時点で第四聯目上句の体言の下に助詞と誤解される「を」が書き加えられると、全節とも「を」がついた歌詞に変化したことも考えられる。ちょうど、創立二二〇周年を前にした再点検で発見できたことは幸いであつた。そして、「燦たる理想」は「さんたーるりそーう(お)」と訂正した。

「理想」は「りそーう」であるが、「りそおお」では何となく馴染みにくく、これで万事よしといいきれず、音節表記の問題については再検討すべき点が残る。

また、実際には「を」とは別に誤謬がもう少しある。逆の例であるが、第二節第三聯下句「澁測の精神(に)」である。『五十年史』では「澁測の精神」、『七十年史』と『百年史』では「澁測の精神」となつてばらついているが、ここには明らかに「に」が必要である。

さらに例示すると、第二節第三聯下句が「人世の曙に」と「人生の曙に」が、いつの間にか混在していること、さらに「われら」「吾等」「我ら」(各節)が混在していることがあげられる。これらは、いずれもまことしやかに変わってしまったている。

さきにもあげた服部嘉香の歌詞改訂の願い出には、様変わりするような字句の改変はまったく考えてもいなくて、ばらついた日常語の今日的な修正統一を期したいという願望があつたのかもしれない。私は、理事会で必要なしとされた願い出に対して、服部揮毫の扁額にわずかながらもメッセージがこめられているのではないかと思つたりする。

これらの例から常用漢字、現代かなづかい等の規範に照らして、一定のポリシーで修正するべきだとする意見

と、あくまでも伝統主義を貫き、原文に固執する両論が存在することは明らかである。また、両論があるからこそ、混乱が派生するのであって、明確なる方針の確立が望まれるところであろう。

話題を転じる。通常、作曲家が書き上げた五線紙は万人が正確に読み取れるといったものではない。専属のライターが丁寧に清書していく。学歌の場合にもそれが残っている。タイトルを「關西大學學歌」とイラスト文字風に手書きしたものを『學報』（第四号）の付録として印刷し、広く学生に配布したものと思われる。

まず第一は、このライターが清書した学歌の歌唱譜には「関西大学 長き歴史」の音を「カンセイダイガク ー ナーガキレキシ」と記している。関西学院大学との混同があったものと思われるが、案外、ライターは印刷所の版下原稿ライターとみるほうが当たっているかもしれない。

次に、この譜面は、歌詞をきっちり振り付けた歌唱譜で、これが昭和二七（一九五二）年に活版印刷物として刊行され、広く学内に配布されていることである。ただ

し、惜しいことに、先のライターによる清書では正しかったのに、「さんたーるりさふを（燦たる理想を）」と余計な「を」がつく難点を残している。これからみても、間違いは、相当長い期間にわたるものと考えられる。これらの経緯からして、主旋律だけを記した、先の「大学歌集」（シート形式）は、できるだけ早い機会に改訂しなくてはならない。伴奏譜もつけた楽譜を学歌として再確認することによって、実際に歌う場面での不統一（ばらつき）を是正できるとともに、山田のレッスンにあるように「厳肅・壮大・雅麗」に歌うためにも必要なことであろう。

## 7 学歌のテンポ

学歌については歌唱時のテンポの難題が残る。学歌の歌唱時間は六二・五秒となるはずである。しかし、巷間で歌われる学歌はかなり遅く、曲に指定されている「マーチのテンポで、力強く明るく」といった雰囲気とは程遠い。山田耕筲のレッスンの内容を再確認したいものである。

学生や校友が様々な場面で、好き勝手なテンポで歌うケースが指摘されている点であるが、こういっても、学園歌のうちテンポを指定した曲は学歌と新学生歌、関西大学讃歌の三曲だけに過ぎない。最近では、関西大学讃歌を除く学園歌のいずれもが、主旋律のみの楽譜となっていたことも一因となり、学生の音楽関係クラブでは、毎年、指揮者が代わると、自らの個性を打ち出すために適当に編曲する慣わしがあるように見かけられる。「斉唱曲」であるはずが、学生が演奏すると、二部三部の重唱曲となり、あるいは輪唱曲となったりする。主旋律だけの単調を避けて、適当に編曲して変化、装飾や新鮮味を求めてしまう。指揮者が自己の存在を示そうとするのも分からぬ話ではない。考えてみれば、同じ交響曲でもカラヤンと小澤征爾の演奏は異なる。

## 8 貴重な新資料の登場

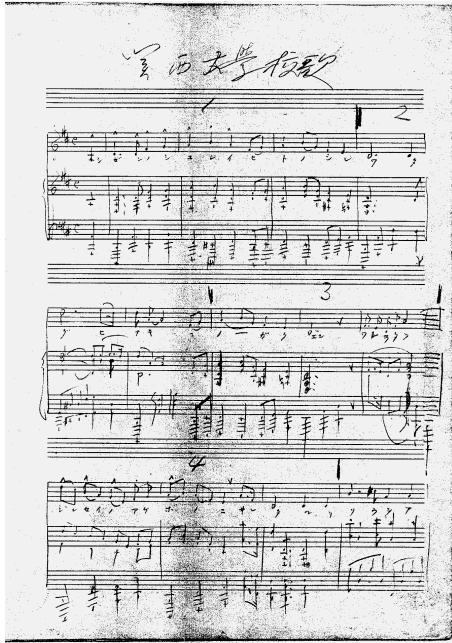
ところで、この稿を書くにあたって、再々度、年史資料類を精査したところ、貴重な資料が見つかった。それは、学歌が完成した直後に作成された伴奏譜も入った歌

唱譜の完全版である。厚手の白色上質紙でA3判二つ折（A4・四ページ）に印刷されたものであり、表紙（第一ページ）には「關西大學學歌」とタイトルが書かれ、下方にMCMXXII（一九二二年）とある。二・三ページは楽譜（見開き）、四ページは歌詞となっている。

この新資料は厚手の白色上質紙の雰囲気からみて、フォーマルな場での合唱団員が手に持つスコアを連想させる。『年史』にはどこにも記されていないが、制定後、学歌の発表セレモニーがあったのかもしれない。もう一点は、山田耕筰の歌唱指導時のテキストとして準備されたものとも考えられる。作成年をはっきりと書いてあることからみても、制定直後の公式の場において用いられたものとみて間違いない。

この新資料は、先に「学園歌」ファイルを作成する際にも見逃していたものであるが、A4・四ページで紙袋に入れて学園歌関係のオリジナル資料箱の底敷に埋もれていた品物であった。どちらかというと、作詞者、作曲者の手書きの原資料に関心が集中していたためである。

昭和二七（一九五二）年、『学報』の付録として復刻さ



れていたことはすでに書いたが、その原資料となつたものと思われる。

そこで、学歌については、この新資料を再度、作詞者、作曲者のオリジナルと照合したうえ、確定版として認め、その周知を図るべきであろう。

余談ながら本学千里山キャンパスでは、正しいテンポの学歌のメロディを毎日聞くことができる。一七時五〇分の五時限終了時に「総合学生会館 メディアパーク

### 關西大學學歌

<p>一、自然の秀麗 我等立つ 懐たる理想 學ぶは一途 若き心に 關西大に</p> <p>二、眞理の討究 我々等若 たぐひなき 榮ある文化 日るを勉み 關西大に</p> <p>三、自由の訓練 我等期す 正義の奉仕 歩みは一途 關西大に</p>	<p>關西大學學歌 原部 藤香</p> <p>人の親 人生の眼 仰ぎつづ 誠へなん 長き歴史 此の實化 沿道の精 研るべく 忘れまじ 世に於て 人格の發 達に對す 先進の 高き歩</p>
---	---

Music By Kosak Yamada



凜風館」で奏でられるカリオンで聞く学歌のメロディが、メトロノームの代役を果していることを伝えておきたい。



上述のように、学歌制定前後の経緯をみると、決して順風のなか、穏やかに誕生し、歳月を重ねてきたものではなかったことが分かる。ただものの学歌ではないと想像する。

ここに述べてきたことは、乏しい史料の紙背や行間を読み取るうとした一私見に過ぎない。しかし、乏しいといいつつも、『学報』をはじめ、貴重な資料の中からいくつかの核心を見いだせたのは幸いである。

それにしても、大学令による大学に昇格した頃の関係者の熱情は想像に余りある。鮮烈なポリシーに基づき、それに反するものは容赦なく打破し、納得できるものを直情的に求めていくという、山岡順太郎をはじめとする当時の関西大学関係者の気迫が満ち溢れ、いわば風土として根づいていたことがありありと想像される。そして、われわれ後進にとって大切なことは、学歌の沿革を辿って知る、先人のほとばしるような情熱と知恵から滲みで

る豊かなものを継承していくことにある。

## 二 学生歌について

### 1 学生歌の成立

学歌に次いで取り上げたいのが学生歌である。

学生歌は学歌制定の翌年、つまり大正一二年の一二月四日となっている。当時、大学予科三年生であった浪江源治（一九〇三～一九七六）が作詞し、同級生の中村良之助（一八九七～一九五七）が作曲した。浪江は卒業後、弁護士となり本学員外教授、評議員を務め、中村は、のちに本学教授となった人である。

ところで、この学生歌の成立は果たして何時であったのか。

各年史をひもとくと、『五十年史』（年表二二ページ）には、大正一二年四月に「学生歌を選定す」と記されているが、本文中には記事を見いだせない。『七十年史』（二七二ページ）では、一二月四日に制定したことが記されているが、年表には大正一二年四月に「本学学生歌を選定」と記載していて、明らかに本文との不一致が認めら

れる。また、その本文には次の記述がある。

旧制大学への昇格後、学生たちは電車賃の高い北大  
阪電鉄に対して運賃の値下げ運動を行い、吹田から  
千里山まで一学期の間歩いて通った。その道すがら  
唱うために作られたものだという。学校はこれをス  
チューデント・ソングとしてとり上げたのである。

そして、これに続いて歌詞が五節まで列記されている  
が、多くの印刷物の中には第三節までで完結しているも  
のもあり、歌詞が第五節まで存在することが案外知られ  
ていなかった事情がある。一方、『百年史』では、本文、  
年表ともに大正一二年四月説をとっている。(大正一二  
年)一二月四日なのか、それとも一二年四月なのか、年  
月のとり違いからきた誤りと推測されるが、大正一二年  
であったことに誤りはないと考えられる。学歌の成立と  
相前後したこの時期、学生にも運賃の高い私鉄に一学期  
間不乗運動を貫徹する気迫が満ちていたということであ  
ろう。

## 2 誕生のエピソード

学生歌の完成は一二月なのか、それとも四月か。

作詞者の浪江が員外教授、評議員を務めていた昭和三  
〇年代の前半、浪江は評議員会が開催される日によく総  
務局校友課(当時)に立ち寄り、しばし歓談する機会が  
多かった。そんなある時、話題が作詞の苦勞話に及んで、  
「下宿で蒲団にもぐり、頭を絞って歌詞を書いたもんで  
すよ」と語っていたことを、側で聞いていて明瞭に覚え  
ている。裸電球の明かりを頼りにして鉛筆で歌詞を書い  
た様子を懐旧の思いで話したものであった。

この状況から、作詞は冬場に大詰めを迎えたと思像す  
るならば、曲も完成してすぐに一二月ということもあり  
うる。反面、寒中に完成したあとと学生間に広がり、四月  
に入って、たまたま不乗運動が起こった時に、徒歩通学  
の道中で歌うようになったとみるのが自然のなりゆきか  
も知れない。いずれにせよ、この歓談の言葉の端からは、  
断定できないことである。

加えてこの学生歌が大学予科の学生の作であることに  
注目しておきたい。旧制官立大学への過程としての旧制

高等学校に相当するものとして、私学には大学予科が置かれていたのが通例であるが、旧制高校が高度の専門教育への関門として、幅広い教養を育む場であったと同様に、私学の予科にも共通した土壌があったのではないかということである。もちろん、浪江の父は漢籍に明るい人であったと伝えられているので、浪江自身に親の影響があったことは否定しないが、合わせてこの修学環境を挙げることができるのではないかということである。常々、学生歌の歌詞をみるたびに作詞者の語彙の豊かさに感服する。

### 3 学生歌の歌詞

この学生歌の歌詞は五節で構成されている。字面（じづら）をみると生硬な感じを拭いえないが、漢字含有率が高い（五二％）ためかもしれない。さらに熟字訓で歌わせる用語が点在することも影響しているようである。

熟字訓を含む難読例をあげていくと、第一節では「憧憬（あこが）れつ」「円（まどろ）む」、第二節「海洋（わたつみ）」「鉄（くろがね）」「丈夫（ますらお）」、第三節

「夕星（ゆうづつ）」、第四節「海士（あま）」「漁火（いさりび）」「燈（ともし）」「丘の上（え）の」と、ざっとこんな具合である。第四節には「すなどり」があるが、正しく「漁（すなど）り」とはせず、なぜかひらがなを使っていたりする。ここに冗長に列挙したのには理由がある。この学生歌がもつとも歌詞のばらつきが多い学園歌なのである。

ばらつきのもつとも多いのが第二節である。第二行目の「底ひに知れずに秘められし」とある「底ひ」である。これは正しくは「底方」で「そこい」と読む。ただし「底ひ」と書いて「そこい」と読んでもよい。この「きわまる所。果て。極み。」を表す用語が今では広く知られていないことから、各『年史』でも取り上げ方はばらついてしまっている。

さらに、ばらつきの大きいのが第三行目の「幾そ」である。これは、正しくは「幾十（いくそ）」である。十三（＝地名・じゅうそう）の「そ」であり、「十合（そごう）百貨店」の「そ」である。この二語は、今では日常的にはほとんど使用しない。いわば死語に近いが、辞

書には登載されている故に、勝手にばらつかせたほうの勉強不足であろう。ただ、「底ひ」は「底い」との混用にとどまるようであるが、「幾そ」は「幾層」「幾ソ」「幾多」、なかには「幾」の次に「しかばねかんむり」にカタカナの「ソ」を書き入れた「厩」まで出現している。

大量を表す「幾十」は、日常的にもよく「幾そ」と使用したようで、「大学歌集」(シート)の印刷にあたっては「幾そ」とした。

ところで、このような用字用語の問題とは別に、作曲上の大きな問題がうかがわれる。

この学生歌の歌詞は、通覧すると七五調で統一されている。七五調は、島崎藤村の「初恋」に代表されるように、日本語の美しいリズムを表現する語調であり、作詞者が夢見たスタイルであったと思われる。しかし、まことに惜しいことに、十分に推敲するだけの時間的余裕がなかったのかも知れない。七五調六聯で一節を構成する歌詞が、しかも、よりによって第一節に破調をきたしているのは、何度みても惜しい限りである。第一聯「御空に輝く」と第三聯「久遠の理想を」が七音ではなく八音

に、また「高く求め」が五音でなく六音となっているのである。とくに第三聯は学歌に倣い「久遠の理想」で止めていると、字余りの一か所は破調を避けられたところである。

さらに惜しまれる点は、この破調の第一節に曲をつけてしまったことに起因するばらつきである。このために、第二節以降では、歌唱時にどこかに長音を挿入して辻褃を合わせねばならず、さらに、歌う人や機会によって、この長音の入れ所が違い、学生歌のばらつきを温存する原因となっていることである。

この学生歌の歌詞の主題は、第一節から「空・海・空・海・空」と空と海が交互にでてくる構成となっている。作詞者は字余りがあっても、「御空に輝く…」と歌いだす「空」から始めたかったのかも知れない。仮に、字余りのあるこの第一節を終節に回し、盛り上がるフィナーレとして曲をつける方法もあったと思うと残念である。しかし、このように一方的に想像するのにも問題がある。案外、作詞者は、字余りの八音にリズムを描いていたのかも知れないからである。

この学生歌は長く三節で構成された歌だと思ひこまれていた。「あれ、第五節まであったのか」と驚かれた話がよく聞かれる。長老校友には、まことしやかに、そう思ひこんでいる人が多い。そして、第四節以降はあとになつて書き足されたというのである。しかし、これにもまた、確証はない。私は、むしろ、歌詞に使われている語彙をみても、また、空・海・空・海・空と並べられていることからみても、これは、浪江源治のオリジナルと思ひたい。ただし、最初から第五節まで完結していたものかどうか、このあたりは、正直なところ心もとない。

そして、この歌詞を読み、条件反射のように、すぐに学生歌の旋律を連想するのではなく、新鮮な気持ちで七五調の詩として朗読してみれば、また新鮮な印象を受けられるのではなからうか。

念のため、少々長くなるが、ここに浪江が作った学生歌の歌詞全五節をあげておきたい。

- (一) 御空に輝く撩爛の 北斗の星に憧憬れつ  
久遠の理想を高く求め 辿る天路の草枕  
行く若人の仮寝にも 円む夢の清き哉

(二) 紺碧深き海洋の 底ひに知れず秘められし

幾その宝搜すべく 腕鉄の丈夫が

丈余の櫓權舵取りて 今し舟出の朝ぼらけ

(三) 空に瞬く夕星の さやけき光仰ぎみつ

いざ高誦さん精進の 自学の曲も朗かに

歌う歌人の胸底に 若き命の響あり

(四) 若き海士の背夕陽あび 月苦の上に傾きて

暮るればゆらぐ漁火の 友の燈と手を取りて

語り交しつすなどりの 今宵憩わん自治の島

(五) 瞬く星の啓示受け 囁く波の私語聞きて

青葉隠くるる丘の上の 自学と自治の学園に

灯す燈火の清ければ 千里の原に月淡し

なお、この学生歌には、一時期、作詞者、作曲者に続き「清水脩編曲」と併記された大学の印刷物があつたが、年代も合わず、何かの思い違いによるものであろう。この誤りは現在は見かけない。

### おわりに

昨今みられる関西大学学園歌の乱れを憂慮して、正し

い姿で継承されることを願う見地から、学歌と学生歌の沿革と現状を簡単にまとめてみた。ただ、振り返って痛感したのは、音源に関する必要な史料が乏しいことであった。学園歌を取りまく状況がどのような状況にあるとはいえ、貴重なものが校友によって持ち込まれたケースもあった。昔のSP盤といわれた学園歌のレコード盤とゼンマイ式のポータブル蓄音機一式が寄贈されたことである。寄贈主は中嶋英文氏（昭四四学一経）で、同氏からの聞き取りによると、SP盤は昭和六年頃のもの、蓄音機は昭和初期のものと推定される。ゼンマイ式ポータブル蓄音機はハンドルでゼンマイを巻いて動力源とするが、回転が不安定で、正確な七八回転の速度を長時間安定して保つことは難しい。このレコード盤から得られたことは次のようなことであった。

① 収録されている曲は、「学歌」（A面）と「学生歌」（B面）の二曲である。

② B面の「学生歌」とあるのは、今日、われわれが「応援歌」として歌っているものである。

たかだか八〇年以内であるにもかかわらず、学生歌と

応援歌との関係や変遷に新たな疑問が起こり、改めて今後の考察を待たなくてはならなくなった。こうして貴重な資料が寄せられたとしても、なお学園歌の沿革を詳細にたどることは難しい。このSPレコード盤についても日本コロムビアレコード社原盤番号二六五〇A・Bをよりどころに製造元に照会したが、この原盤番号に限ってまったく詳しいデータが残っていないことが判明した。ただこのレコード盤によってはっきりしたことは、「千里桃源の」と歌う現在の応援歌は阿賀杜里作詞、阪東政一作曲であること、阪東は昭二六経卒の校友であることである。

いろいろと書き連ねてきたが、たとえ、演繹的な考察を試みても実証による説得力には乏しく、記述内容には、常に、「It may be that」がつきまとう。今回は、紙幅の都合等から他の学園歌にまで言及できなかつたが、長く歌い継がれている逍遥歌や、比較的新しい新学生歌、関西大学讃歌などの沿革について書き記しておきたいこともある。

さらに、音源に関わる分野にとどまらず、スクールカ

ラーの変遷、校旗、校章や襟章等、沿革を明確にしておきたい対象は多い。さらに、新たに加わった関西大学北陽高等学校関係のそれらの沿革をも明確に記録として残しておく必要がある。

いずれも、ただ一つの目的は、たとえ時代や場によってバリエーションがあったとしても、正統なる学園歌の真髄を体して、母なる関西大学へのアイデンティティを脈々と、そして誇らしく継承し、高揚させていってほしいという、ただその一点にある。

(いしだ けんいち 年史編纂委員会委員・)

関西大学教育後援会)